

A history of women in Japan



監修 円地文子

近代日本の女性史 6

事業への理想と情熱

集英社

のむら
野村ミチ



古美術商サムライ商会、国際ホテル・横浜ニューグランド(上)の経営者として腕を振るった野村洋三(のむら)の妻ミチ。ミチは、二人三脚の共同経営者として夫のよきパートナーであった。

よしの
吉本せい



せい(上)が買い入れた通天閣(つうてんかく) (右)は、大阪新世界の中心にそびえ、吉本王国の象徴として人々に強烈な印象を与えた。写真は再建後のもの。



すずきの
鈴木よね



▲ 鈴木商店のれん

◀ 鈴木よね胸像 よねは、総合社長の元祖「鈴木商店」の主として君臨した。



鈴木商店の看板

よねの歌集「波の音」「鈴の音」





鈴木商店の尼將軍
鈴木よね

最初の不幸な結婚の破たんの後、よねは商人鈴木右治郎の妻となった。商才と野望にあふれる岩治郎はみるみる頭角を現すが開花の矢先に急死。よねは、夫の夢を自らの夢として引き継ぐことを宣言する。女主人よねの下、大番頭金子直吉・柳田富士松らは、水を得た魚のように活躍、やがて世界市場へと進出、華麗な発展をとげる。しかし、昭和初期の金融恐慌で倒産「鈴木王国」の歴史に、よねは自らの手で幕をおろす。



アンピンシラス・ガール
相馬黒光

向学心に燃える少女良(黒光)は、ほのかな恋ごころをよせていた布施淡の婚約を知って相馬愛蔵と結婚。愛蔵の郷里信州穂高に住むが、閉鎖的な農村生活は良を絶望させる。夫帰で上京、良の発案でパン屋「中村屋」を開業する。新しい商品の開拓、販売など、良にとって「商うことそれ自身がよるこび」だった。一方、良を慕う彫刻家荻原碌山を中心に良のまわりに芸術家たちのサロンが形成されていった。



夫の共同経営者として
野村ミチ

横浜で外人相手の古美術商「サムライ商会」を営む野村洋三と結婚したミチは、商用で出歩くことの多い夫にかわって店をとりしきる。ミチは、「太平洋の懸け橋」になろうと志す夫の仕事のベター・ハーフとして商才を磨き、ものごとを世界的規模で見るスケールの大きな女に成長していく。しかし、隆盛の最中の「サムライ商会」を襲った関東大震災で全財産を失い、再起に苦しむ洋三をささえてミチは……。



社会事業に献身した
九条武子

京都西本願寺の深窓の姫君として生まれた武子は、活発で聡明、年少女だった。九条良致と結婚、一年のロンドン生活の後、夫を残して帰国、急死した義姉の意志を継いで婦人会の仕事にとり組む。歌集の出版など、生来の美貌とあいまって一代の名花とうたわれる。一方、その深く宗教に根ざす心は、武子の目を貧しい人々にむけさせた。関東大震災の罹災者の救護、医療事業に献身する武子だったが、ついに病に倒れる……。



吉本興業の女主人
吉本せい

吉本吉兵衛に嫁いで船場のご主人さんになったせいだったが、ぼんぼん育ちの夫の道楽から家業は倒産。せいは寄席を開業することを思いつく。一流の寄席に対抗するため、せいは夫を励まし、次々意表をついた新企画をうち出して、着々と寄席の数を増やすことに才覚を発揮する。夫の死後は、弟正之助を後ろ盾に東京に進出。次第に漫才に力を入れ、若いファン層を獲得、大阪の笑いの文化を根強く育てていった。

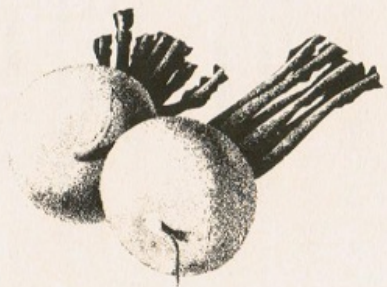


美谷王国を築いた
山野愛子

早くから自立を目ざし、髪結いで一本立ちすることを考えた愛子は、美容学校を卒業すると、「御髪結・松の家」の看板をあげる。店は順調に拡張され繁盛する。婿養子にむかえた中谷治一は事業家としての素質を持った男だった。彼は、いちはやく輸入品のパーマメントの機械に着目、自ら技術を習得、さらに機械の製造、販売を企画する。愛子と治一の二人三脚のうえに美容の山野王国はさらに大きく築かれていく。

鈴木よね

荒井とみよ



監
修
編集委員

円地文子

佐藤愛子

清水好子

杉本苑子

竹西寛子

田中澄江

田辺聖子

吉見周子

後藤市三

布施行造

装
幀

鈴木よね略年譜

嘉永五年（一八五二）姫路の仏壇漆塗師、丹波屋西田忠右衛門の三女として生まれる

明治十年（一八七七）神戸の若い商店主鈴木岩治郎と結婚。よねは以前に一度結婚に失敗していた

明治二十七年（一八九四）岩治郎急死。岩治郎の後を継ぎ「鈴木商店」の経営にのりだす。大番頭金子直吉らの働きで仕事は順調にのびる

明治三十六年（一九〇三）九州大里に製糖所を作る。四十一年に大日本製糖に売却、膨大な利益を得、後に国内の砂糖市場を制覇する

明治三十八年（一九〇五）小林製鋼所を買収し、神戸製鋼所として出発、重工業部門への礎となる

明治四十二年（一九〇九）ボルネオに進出。ゴム栽培と南洋貿易の足がかりとする。神戸高商を出た高畑誠一が入社、のちロンドン支店長となり大活躍

大正六年（一九一七）年商十五億円を越え、三井物産を抜いてトップに立つ

昭和二年（一九二七）金融恐慌の波をかぶり鈴木商店倒産。金子直吉ら鈴木商店再建に奔走

昭和十三年（一九三八）よね没、八十七歳

参考文献

- 『金子直吉伝』（金子・柳田両翁顕徳会刊）
- 『柳田富士松伝』（金子・柳田両翁顕徳会刊）
- 『金子直吉遺芳集』（柳田義一編・刊行）
- 『総合商社の原流 鈴木商店』（桂芳男著・日経新書）
- 『嵐』（城山三郎著・文春文庫）
- 『日本資本主義発達史』
- （後藤靖・佐々木陸爾・藤井松一著・有斐閣双書）
- 『昭和恐慌』（長幸男著・岩波新書）
- 『黒い米』（武田芳一著・のじぎく文庫）

著者・荒井とみよ

松蔭高校教諭。一九三九年、福井県に生まれる。奈良女子大卒。国文学専攻。『日本小説を読む会』会員。著作に『井上光晴論』『熱い落日―青鷲おぼえ書』ほか。

辰巳会

初夏の陽光がひとときわ明るい六甲山麓の祥竜寺で、辰巳会二十周年記念大会が開催された。昭和五十五年五月のことである。

辰巳会は、旧鈴木商店の関係者による懇親会である。明治中期に砂糖商として出発し、大正期に大活躍をしたけれども、昭和初期の恐慌で倒産した、あの鈴木商店のである。鈴木はその派手はでしい発展ぶりに、「鈴木王国」とまで呼ばれ、経済界ばかりでなく、政治的・社会的にも常にゴシップの種になっていた。しかもその主は女であったために、鈴木よねという彼女の名前の上に、しばしば「女王」「女傑」「尼將軍」などの呼称が冠せられ、特に地元神戸では、「鈴木のおよねさん」「鈴木のお家はん」を知らぬ者はなかった。鈴木は直系・傍系あわせて六十を超える会社を経営し、その内容も海外貿易をはじめ、生産・流通のあらゆる部門にわたり、いまいう「総合商社」の元祖であった。鈴木商店は、三井・三菱とともに世界の市場を争う一大企業であったのだ。

石段を上って山門を入ると、楠の若葉が目には溢れ、藤やつつじの豪華な競演が見られる。こぢんまりとしているけれども荘重な風格の感じられる境内に、木の香も新しい奇進札が高々と立っているのは、本殿屋根修復の大工事がいよいよ始まることを告げているらしい。

続々と山門を入ってくるのは、ほとんどが老人であった。当然のことである。鈴木商店が消滅して

から、すでに半世紀を越えているのだから。

昭和三十五年に辰巳会は結成された。この命名は、鈴木商店の本家の屋号（大阪の砂糖商「辰巳屋」に因んでいる。彼らは毎年集い合ひ、ここに二十周年を迎えたのである。

この日の参会者は百五十名。会員総数三百八十名だが、そのうち九十歳以上が十四名いる。八十歳以上は百八十四名という。彼らは集うことに物故者の法要を営む。この日もプログラムの主なものは、その前年逝去した大屋晋三ほか数名の供養であった。

辰巳会会長の鈴木治雄氏はよねの孫であり、西川政一氏は文蔵の、金子武蔵氏は直吉の、柳田義一氏は富士松の息子たちである。高畑千代子氏は先年亡くなった高畑誠一の夫人、やはりよねの孫である。

彼らは老いて、先代たちに似て来たのでもあろうか、ふと目の前の現実から色彩が剝落していく錯覚に襲われる。すると祥竜寺境内の園遊会風景は、まるで大正時代、鈴木商店華やかなりしころのそれなのであった。境内の墓地には、よねをはじめとする先代たちの顕徳碑が建立されていて、不思議な幻覚に陥ることをいっそう促すのである。

一年に一度顔を見る、そのことに意味があるのだという人もいる。最後の一人まで葬式をしていくのだという人もいる。介添えなしでは歩行も困難な老人たちが、会釈を交わし、歓談している。ゆっくりとしか移動できない彼らは、長い時間をかけて記念撮影する。

酒樽が割られ、模擬店が賑わう。床几にたむろし、演歌や民謡を披露する。個人企業の現状を報告している老人もいる。マイクを持っていてる人に特に注目もしないけれど、無視しているのでもない。ほかのどこでも接したことのない不思議な園遊会なのであった。

これはのどかな実家帰りなのであるらしかった。今ぜひしておかねばならぬ話は、あまりないらしかった。老人たちが帰り仕度を始めたのは、散会予定の時間にはまだまだ間のあるころであった。



「お家はん」と呼ばれた鈴木よね

「お家さま」鈴木よねの胸像は、高い台石の上に置かれていて、墓地の中でも群を抜いてそびえている。仰ぐような場所にそれは建てられたようだ。下から見ると、像はいくぶん上向き加減で、まるで地上の賑わいは素知らぬふり、宙を見据えているのであった。

この寺は、昭和二年（一九二七）彼女が二万円の寄進をして

再興されたものである。それまで廃寺同様であったが、妙心寺の管長もして名僧としての評判も高かった愚溪和尚が、隠居するに際して再建されたのである。和尚がそれまで住持した神戸平野の祥福寺に似せてそれは建てられた。

よねは愚溪和尚に深く帰依していたが、昭和二年といえど鈴木商店倒産の年である。寄進の話はい出しかねていた。けれども、社長としての給金は一銭も払われていなかった、一代の給金を積み立てたものとみれば不当ではないということで、会社は許したのであった。

辰巳会会長の呼びかけで、今回の祥竜寺改修の寄付金は七千万円にも達した。辰巳会の人々は、これもみな「お家さまのご威光」であるという。

それにしてもよねの銅像は、なぜあんなに高い台座の上に置かれているのであろうか。何かしら周囲との均衡を無視した高さであった。

先代岩治郎

姫路市米田町は白鷺城の西南に当たる小さな一角である。大通りに林立するビルの間を少し入ると、戦火をまぬがれた古い家並みが残っていて、仏壇屋、蠟燭屋、和菓子屋などの時代があった看板が見える。ふり仰ぐと目にまず入るのは天守閣で、ここには時間が流れていないように感じられるが、百年前のことを尋ねても応えてくれる人はいない。

鈴木よねは、この町の仏壇漆塗師、丹波屋西田忠右衛門の三女として生まれた。嘉永五年（一八五二）八月十五日のことである。忠右衛門は丹波からこの城下町に漆を届ける漆取りであったが、米田町の塗師、福田惣平に見込まれて、同じ町内に借屋住まいの商いを始めた。商売は繁盛し、妻りよとの間には七人の子供も生まれた。

よねは、働きの父母、兄弟の多い幸福な家庭に長じ、主人筋の福田家の次男に嫁入りした。とこ

ろが両家の確執の巻き添えを食い、不縁となった。似たような家同士の不和はどこにでもあろうし、それでも耐えていた女は多い時代であったが、よねはその道を選ばなかったのである。

よねの兄（西田仲右衛門）は青雲の志を抱いて神戸に出ていたが、銀相場で成功した。この兄の縁で、やはり神戸の若い商人、鈴木岩治郎とよねは再婚することになる。後年、よね自身の口から不幸な最初の結婚について語られ



鈴木商店を創設した、初代岩治郎

ることは一度もなかった。語られないだけに、小さな町での憂鬱な体験は、よねの胸の奥に懐剣のように深く秘められたらというべきかもしれない。

鈴木岩治郎は、もと川越藩の下級士族、武士とは名ばかりの貧しい夫婦の次男に生まれた。生まれるとすぐに養子に出された。幼くして他人の世界に投げ込まれたことが、彼の商才と野望を育てた。

菓子職人として自立したとき、養育をすでに放棄した父母と兄が彼を頼って来た。目ぼしいものは全部家族に譲り、岩治郎は再び無一文になって長崎へ旅立った。長崎は新時代の拠点であった、洋菓子子の玄関であった。無銭の修業の旅は放浪に似ていたが、小さな菓子屋に納まり切らない自分の器量を確認する旅立ちでもあった。いくらかの金を長崎で蓄えた彼が、なぜ東京に帰らずに神戸に停まつたかについては、いくつかのエピソードもあるが、事実かどうか確かめる方法はない。ともかく運命としかいいようのない経緯をたどって、岩治郎はよねと結ばれたのである。

開港後間もない兵庫の浜に支店を出した大阪の砂糖商があった。辰巳屋という。辰巳屋は砂糖ばかりでなく、清国との貿易で発展し、明治初期には、関西貿易商の筆頭に数えられるところまでいった。この辰巳屋の神戸支店で大活躍をしたのが、鈴木岩治郎である。彼は主人の信頼を得、神戸支店を譲り受け、新しいのれんを掲げた。厨（カネタツ）鈴木商店と称する。

岩治郎は場を得た。活気を呈し始めていた神戸居留地を舞台に、カネタツ鈴木商店の若い主人の商いは、いつも積極果敢であった。

よねが嫁入りして来たのはこの時期、明治十年（一八七七）、よね二十六歳（以下年齢は数え年）のときである。再び生きて実家の敷居は踏むまいという決意があった。その意味で普通の新妻ではなかった。当時の女には珍しい大柄で健康な身体が、豪胆な気性を支えもしたが、草創期の鈴木商店で岩治郎を補佐することは、苦勞を自ら引き受けることでもあり、そういうとき一歩も退くまいとすれば、気丈な精神は一層強くなった。

砂糖市場は急激に拡大し、業界は若々しい気迫に充ちていた。鈴木岩治郎はその中であって、覇を競う一人であった。また、神戸の財界にあっても彼は頭角を現していた。貿易会所の副頭取、商業会議所議員、神戸区取引所発起人などの肩書きが加わっていった。

舞台は整った。開花はいまからであった。

明治二十七年（一八九四）、鈴木岩治郎は突然逝った。まるで、急坂を一息に登り詰めたような激しい一生であった。よねは、四十三歳で寡婦となった。

門 出

その日の出来事を、辰巳会の人々は熱っぽく語る。立ち会った人々はすでにみな故人である。話に尾ひれがつき、脚色があるのは当然のことだが、それらを差し引いて考えても、やはり感動的な出来事であったのだろう。

岩治郎没後、三十五日の法要の席のことである。親戚、店員一堂に会し、商店の存廢について協議がもたれた。旭日の勢いで発展した鈴木商店であるが、変動の激しい時勢でもあり、あまつさえ危険の多い外国商館との取り引きである。このころ居留地の紅毛碧眼の商人の中には、あからさまな愚弄の態度をとるものもあつた。二人の遺児、徳治郎（のち二代目岩治郎襲名）、岩蔵はまだ幼い。後の生活に憂えがないだけの財産はあつた。店は閉めて平穩な生活に入るのがよからうとの意見が大勢を占めた。よねは終始黙して、その腹藏のない意見に耳を傾けていた。

「最後にお家はんのお考えを」という声に促されて、よねは初めて口を開き、「店は続けたい」といい切った。

二十年にも充たない結婚生活であつたが、ここでわたしはほんとうに生きた。気難しい男であつた、理不尽に癩癩を起されたこともあつた。周囲の人々も甘いばかりではなかつた。厳しい仕打ちもあつた。死を思つた日さえある。しかしわたしは逃げたくなかつた。商売の修羅場を生きている男の鼓動を聞くのが好きだつたから。夫とともにわたしも闘つていたから。今、鈴木商店のれんを降ろすことは、夫の野望も葬ることである。夫を二度葬ることはできない。

よねの前で決断を待っている店員は、岩治郎が遺したもつとも大きな財産なのであつた。この財産を生かす道は商売を継ぐことにしかない。商売は彼らがやってくれるだろう。前途有為の若者たちから活動の場を奪わないというだけのことでないか。よねの決意には力みがなかつた。言葉少なに、

夫の夢を自分の夢として引き継ぐことを、よねは一同に告げた。

よねの実兄、西田仲右衛門とカネタツ藤田商店（鈴木商店の兄弟店）を後見人として、ここに店主・鈴木よねの鈴木商店が生誕した。

昭和十三年、よねの死に際して捧げられた弔辞は、鈴木商店のあらゆる業績を彼女の偉業として称えている。よねは「鈴木商店のすべてを為した」のである。

また、後年刊行されたよねの歌集『波の音』の跋文も、鈴木商店の歴史を、彼女自身の事蹟として簡明に記している。

ところが私が出会つた関係者たちは、一様というのであつた。「よねは何一つしていませんよ」と。そして鈴木商店に関するさまざまな資料にも、よねについての記述は数行、しかも事業とは無関係に添えられているだけなのである。



大正時代の経済界に君臨した鈴木商店

鈴木よねはすべてをなしたのか、何ものもなさなかったのか、彼女の伝記はこの亀裂の謎を解くことでもあるのだろうか。

社長よねの鈴木商店は、資本金十万円で出発した。ここに二人の大番頭がいた。柳田富士松と金子直吉であった。

柳田富士松は明治十八年（一八八五）に入店した。不幸な幼少年期を大阪で過ごし、遠縁の岩治郎を頼って神戸に来たのは二十一歳のときである。彼は鈴木商店の砂糖部門を担当した。

金子直吉の生い立ちもまた貧乏物語を地で行っている。土佐で生まれたが、貧乏のあまり学校にも行けず、神主に頼んで手習い算術をしたという。借金する能かない父と、働き者の母とに育てられ、子供のときから紙くず商いをし、見習いをし、丁稚奉公をせねばならなかった。神戸に出て岩治郎のもとに身を寄せたのは、富士松に遅れること一年、やはり二十一歳のときである。彼は樟脳部門を担当した。

岩治郎、富士松、直吉の生い立ちの記は、あまりに酷似している。語り手たち聞き手たちの思い入れの中で、三人の伝説は互いに影響し合い、相似た色合いに染められていったのであろうが、そういう物語を求める体質を鈴木商店そのものが持っていたのである。この三人によねも含めて共通しているのは、しなやかなしたたかさでもいえるようなものである。打たれもまれていよいよ柔らかく強くなる健康な体質である。

世間では攻めの直吉、守りの富士松という。二人のみごとに補充し合う関係は、鈴木商店の歴史の中でも私生活の中でも、一度も揺らぐことがなかった。

躍 進

金子直吉は台湾民政長官の後藤新平に接近して、彼の絶対的信頼を得たが、これが台湾貿易の出発点になった。後に鈴木商店の運命を決める台湾銀行との結びつきもここから始まる。政商としての第一歩をここに踏み出したといいかえてもいいのである。

意気軒昂の若い直吉は、樟脳相場で大胆な空売りをを行い、これがみごとに失敗してしまった。商店は生まれたばかりで倒産の淵に立ったのである。

富士松は直吉を責めなかった。彼は鈴木の身内でもあり、兄番頭でもある。けれども彼は直吉こそ自分でできないことをなす人と、他人にもいい、自らも畏敬していた。直吉が「切れ者」であることを逸早く見抜いていたという点で、富士松もまた別の意味の「切れ者」であったのだ。

よねもこのとき、ごととひとついわなかった。何ごともおもえたちに委せている。好きなようにやればよい。責任は私がとろうと、事ここに及んでも少しも慌てるどころがなかった。

よねの信頼、富士松の協力、直吉は自分のしでかした窮地を脱するために、奮起せざるを得なかった。懐剣をたずさえて相手商館に単身乗り込み、切腹の覚悟で当たったという。幸運に事は解決した



経済界の鬼才として活躍した金子直吉

が、直吉にとつては初めての苦い苦い薬であつた。

この出来事は、店員たちへの無言の進軍ラッパであつた。「お家はんの信頼は、口先だけのものやない、大番頭はんは仕事のやれるお方や」という意味で。明治二十九年（一八九六）のことである。

数年のうちに銀行預金は当初の二倍になり、商店は合名会社鈴木商店として整備された。資

本金は五十万円であつた。ロンドン、ニューヨーク、ハンブルグに販売店が置かれた。

明治三十六年、九州大里に製糖所を設置、三十八年には、小林製糖所を買収して神戸製糖所として出発、重工業部門の発展への礎であつた。四十年には大里製糖所を大日本製糖に売却した。二百五十万円で作つたものを四年後に六百五十万円であつて業界を驚かせると同時に、国内砂糖市場の販売権を取得したのである。四十二年にはボルネオに進出、ゴム栽培をはじめ「南洋」貿易の足がかりとした。

躍進、また躍進であつた。直吉の賭はすべて当たつた。富士松は直吉の要求どおりに資金繰りをした。商品内容も多角化した。船舶部門が創設され、海運界に躍り出ようと目論んでいた。大型船第一号は「米丸」と名づけられたのである。

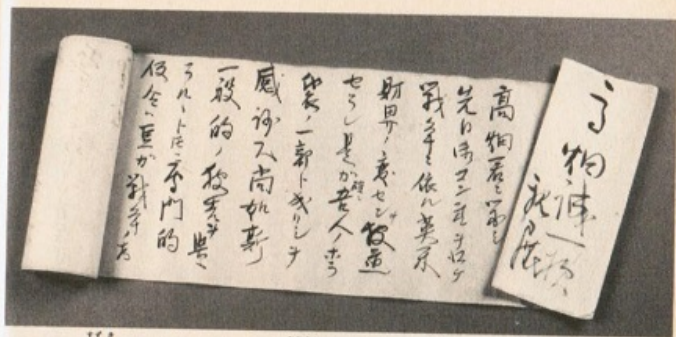
このころ、西川文蔵をはじめとする学卒者が入店して来た。勘と経験で働いていた鈴木商店に近代の風が吹き込んで、一層活気づいた。鈴木商店は明治の末には砂糖市場を制覇したけれども、もはや砂糖商の鈴木ではなくなつていた。彼らはこのような高揚の中で第一次世界大戦を迎えたのである。

世界市場で

後半の鈴木商店の主役には、高畑誠一が加わる。明治四十二年（一九〇九）、神戸高商を卒業、同時に鈴木商店に入店した。彼は三井物産を志望したらしいが、当時の校長の強い勧めで鈴木商店に入ったという。校長は東京高商の出身で同窓の西川文蔵を知り、神戸商業会議所で特別議員として同席した金子直吉を知るに及んで、高畑誠一の運命を鈴木商店に結びつけたという。もし高畑が志望どおり三井物産に入っていたら、鈴木商店はどうなつていたらう。歴史の仮定にはあまり意味がないかもしれないが、そういう誘惑に抗しがたい運命の配置なのであつた。

鈴木商店は二十代の高畑をロンドンへ送り込んだ。若い支店長は世界市場を相手に立ちまわり、世界の猛者たちを刮目させた。高畑の商才は本店の独裁者・金子の積極策、拡張策とみごとに響き合ったのである。

三国間貿易が始められた。ヨーロッパから日本へ銑鉄などを運んだ船舶の帰路を利用して、サイゴ



鈴木商店の発展に奮闘した直吉の手紙(“天下三分の計”高畑誠一宛)

ン米を積みフランスに売り込んだりした。大戦による食糧難に乗じて給ごと売り込む「一船売り」も世界の商人たちを驚かせた。スエズ運河を通過する船の一割近くに「米丸」の旗が翻った日もあったという。イギリス政府もフランス政府も鈴木商店にとつては一介の客であった。各海外支店と金子直吉との間に張り巡らされた連絡網に、秒刻みの情報が行き交った。このころ鈴木商店は、政府や新聞社を凌ぐ情報を集めていた。

大正六年(一九一七)には年商は十五億円を越え、ついに三井物産を抜いてトップに立った。このとき金子直吉が高畑誠一に宛ててしたためた手紙は「天下三分の計」として語り継がれている。

「……今、当店の為し居る計画は凡て満点の成績にて進みつつ在り、御互に商人として此の大乱の真中に生れ、而も世界的商業に關係せる仕事に従事し得るは、無上の光榮とせざるを得ず。即ち、此戦乱の変遷を利用し、大儲けを為し、三井三菱を圧倒する乎、然らざるも彼等と並んで、天下を三分する乎、是

鈴木商店全員の理想とする所也。小生其是が為め生命を五年や十年早くするも、權少するも、更に厭う所にあらず。要は成功如何に在りと考え、日々奮戦罷在り、恐らくは独乙皇帝カイゼルと雖も、小生程働き居らざるべしと自任居る所也。ロンドンの諸君是に協力を切望す。小生が須磨自宅に於て、出勤前此書を読むは、日本海々戦に於ける東郷大将が彼の『皇国の興廢此の一举に在り』と信号したると同一の心持也。

大正六年十一月一日

須磨自宅にて

金子直吉

この書簡は『金子直吉遺芳集』の冒頭を飾っている。奔るような氣迫が墨痕にみちみち、読む者をして異常な興奮に誘わずにはいない。

国内においては、大正六年、米沢市に人造絹糸の製造所を創り、帝国人造絹糸株式会社を設立した。鈴木商店の最も華麗な活躍の時期であった。このとき社長よねは、何をしていただろうか。

よねの当座帳

神戸市役所の市立博物館設立準備室の倉庫に、鈴木よねの当座帳が保存されている。

それは美濃紙罫紙三百枚からなる大部なもので、扉の一枚目に署名があり、「明治四十二年八月二十四日 目出度はじめ」と書き出されている。頁の上部を墨で黒く塗って、いくつかの項目に分類し

ている。「記念品寄付関係」、「書画骨董類」の購入、「一般会計」の記録、「岩蔵米国滞在中関係」、「仲次郎学校関係」、「入会の事」、「住所録」という具合に繰り出すことができる。

二万円の寄付があるかと思えば、一円の瓦せんべいの代金も記録されている。神戸女子商業学校へ多額の寄付を続けている記録もあれば、結局は全うできなかったという甥の仲次郎東京遊学のための諸費用、下宿のことまで書かれている。

最も細かいのは一般会計の部である。店方より入った月並みの金を女中、車夫、別荘番、親戚付き合いに分配した内方の記録である。女中たちへの給金によって、六人から八人ほどの女たちの序列がわかるし、嫁たちへの小遣いにも差があつて、よねを取り巻く人たちの配置、比重が想像される。けれどもこれは大店の女主人の多くが必ずやつていた采配であつて、特に鈴木商店の社長のそれではない。出費は、明治末から大正中期へと数十倍に膨れ上がっているのに対して、女たちに渡る金額はほとんど変化していない。大商店鈴木の家内は、十年一日のようなつましい生活を強いられていたようである。

よねが誰によりも厳しかつたのは、彼女自身に対してであつた。年商が数百万円時代から、十数億円時代へと飛躍している鈴木商店の社長の座にあつて、彼女の姿勢がまず十年一日のように変わらなかつたのである。

忽ち巡る時計のはりを見ておのが怠けの恥しき哉

（波の音）

時計の針を見ておのれの怠けを反省するよねは、家族たちには重い威圧であつた。

彼女にはいつも事業のすべてが、企画の全部が伝えられていた。彼女の前で論議され、裁決が待たれた。答えはいつもきまつていた、「それでよろしいです」と。

直吉に失敗があつたように、柳田にも高畑にも失敗はあつた。しかし彼らは決してそのことで責められなかつた。全責任はよねにある。やりただけの働きをするがよい。よねのこの精神は、鈴木商店の社員構造の細部にまで行き亘つていて、上司は部下の働きを評価するが責めない。

この構造は「家」に似ている。商店の初期においては、社員は三度の食事を会社でとつていたというから、家そのものともいえる。その頂点によねはいたのだ。だからすべての業績はよねのものということなのかもしれない。

大正六年（一九一七）、アメリカがイギリスに次いで鉄材の輸出禁止政策に出たことは、資材を外国に頼っていた日本の造船界に大騒動をもたらした。政府は鉄材を輸入してその支払いを建造した遠洋大型船ですという、いわゆる船鉄交換交渉に乗り出したが、物別れに終わった。業界総動員の民間交渉も失敗であつた。

このとき金子直吉が登場した。世界を相手に日本を背負つて交渉の場に現れたのは、風采の上から小さい小男で、極度の乱視と近視のメガネの奥の目は斜視でもあつた。焦点の合わない視線に対してい

ると、だれも、いつのまにか自分の本質が見抜かれて、錯覚に陥るのだった。人をそらさない話術の持ち主であったが、一見したときは全く逆で、「ア、ソウ」「ヘイ、ソウ」と無愛想な相槌を打つところ、ところが気が付いてみると、まんまと直吉のワナにかかっているのだった。博覧強記は見すばらしい風貌に覆いかくされている。鬼才ぶりはいつも後で、わかる人にだけわかるのだった。

その男が日本の海運界の命運を賭けて闘い、みごとに成功してしまった。「波の音」の跋文も、よねに手向けられた弔辞も、この成功をよねの業績として称賛している。しかもこの弔辞は直吉自身が書き、彼が声涙ともに霊前で読んだものである。直吉はいう。

「……米國ノ鉄材輸出禁止ニ遭遇スルヤ、所謂鉄交換ノ契約ニ依リ、滞リナク約束ノ鉄材ヲ輸入シ、是ヲ各造船所ニ引渡シ、予定ノ造船ヲ終ラシメ、一部ハ米國ニ売渡シ他ハ日本ノ海運界ニ運用スル目的ヲ以テ、國際汽船株式会社ノ設立ニ尽力シ、其ノ運用船ト為シ、日本海運界ノ一大勢力タラシメタリ」

家に似ているが家ではない、不思議なピラミッドである。そのような共同体が、よねを頂点として構築されたのである。

暗い予兆

明治末から大正期へかけての日本資本主義の急激な膨脹は、発展というにはあまりに至であった。

「成金」という呼称には、そうした重なる狂風への嘲笑と嘲諷が含まれている。大戦風潮によって、船成金、株成金、鉱山成金、鉄成金が雨後の筍のように発生し、戦後恐慌の波を受けて泡沫のように消えた。

大正三年（一九一四）、すべての商品船舶に対するいっせいの買い出しに出、みごとに当て、一挙に一億数百万円の巨利を得た鈴木商店もまた、成金の一人であった。

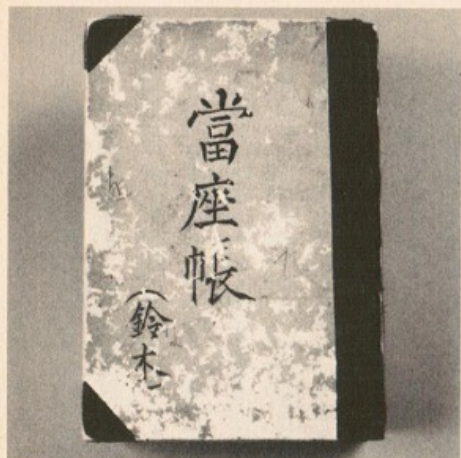
当座帳

(鈴木)

当座帳のよねのしたを詳しく詳しな会計

鈴木の本宅は「須磨御殿」とも呼ばれた一万二千坪の宏大な邸宅で、政財界の大物たちが神戸を通る際には必ず立ち寄ったともいわれている。金子直吉の住居も須磨一の谷にあって、谷川を埋めた広い芝生や果樹園、温室やボイラー付きの浴室、淡路島を眺望するサンルームが工夫されていた。

よねはどんな豪邸に住むようになって、子年の始末屋と自称もし、けちと陰口もたたかれた。直吉の不思議な屋敷は彼の探究心の表現でもあって、ぜいたくや遊蕩とは無縁であった。鈴木商店



についてまわるエピソードには質素儉約の色が濃い。

ひとり長男岩治郎が成金らしさを引き受けていた。釣のために浜辺に家を建て、舟を持ち漁師を抱えた。馬には全国を付いて廻るほどの熱の入れようで、競馬場を作るのに多額の私財を投じた。美食の逸話も女のそれに劣らず多い。

この二代目を知る人は、鋭い眼光が腹の底まで見透かすようでこわかったといい、気をそらさない魅力のある人だったという。前の批評は多く男たちのものであり、後の女たちのものであった。

彼はおそらく明敏な人であったのだろう。母親の器量を知っていた。世間の息子が母親を理解するよりもより深く。金子直吉を初めとする幹部たちの能力も見抜いていた。そして何よりも、よねを頂点とする不思議なピラミッドの構造を掴んでいた。長男が登場するとその構造は微妙に変化するはずであった。彼はそこに変化を生ぜしめぬほどに無能ではなかったから。蕩児の名をほしいままにして、ありあまるお金を使うこと、これが彼が自分自身に強いた役割であった。その役を演じ切ることが、よねや直吉への協力であった。家に似た鈴木商店の構造は、擬制であるからこそエネルギーを持っているのだと、二代目岩治郎は思っていたのである。

大正七年七月、富山に端を発した米騒動は、八月に入って神戸にも吹き荒れた。神戸における小売り米価は、七月初め三十四・三銭（一升）であったものが、八月八日には六十・八銭にまで高騰した。これは門司市に次ぐ高値であった。米価とともに家賃も急上昇していた。大戦景気によって神戸市の労働人口が急増し、住居事情が悪化させていたためである。一年も経たない間に家賃は二倍を越えた。労働者は食と住の両面から締めつけられた。兵庫県下でこの年の七月から八月にかけて発生したストライキは十一件もあった。鈴木商店が焼き打ちに遭う二日前から、三菱造船所では労働者がストに入り、暴動の兆しをみせていた。不穏な空気の中で夕闇が迫るころになると、群衆はあちこちの公園に集まり、口から口へ「焼き打ち」の噂がささやかれるのだった。

鈴木商店の本店は、もとミカドホテルと呼ばれた建物を引きとったものだった。ミカドホテルと命名したのは後藤新平であるが、何かにつけて後藤の名が鈴木と結びつけられたのは、この米騒動のときに特に著しかった。政治家後藤への批判が過熱化していたときでもあり、そのキャンペーンに成金・鈴木商店を用いる効果は大きかったのである。

八月十二日、前夜の小ぜり合いで、湊川公園に集まって来た群衆は逸っていた。東川崎町一丁目にあった鈴木の本店は、湊川公園から押しかけて来るのにちやうどよい距離にあった。同じころ栄町四丁目の鈴木旧店が襲われ、火の手が上がった。群衆は「およね婆を出せ」と喚き、焼いていっそう興奮した。この一隊が東川崎町の本店に合流したのである。黒い群衆は「焼け、焼け」とどよめいた。九時二十分に燃え上がり、十一時にはすべて烏有に帰した。鈴木商店を焼いても群衆はまだ収まらず、辻向かいにあった神戸新聞社も全焼させたのである。

旧店にいて屋根伝いに逃げのびたよねは、「焼いてどないしますねん」と一言激しい怒りをもらし

だが、それは鈴木商店の側の率直な気持ちであった。とりあえずよねは山陰に逃げた。三朝温泉に逗留したが、お供をした愛孫千代子にも、もう一言もぐちはいわなかった。屈託のない富裕な湯治客であった。

金子直吉も刺客に狙われているものもつばらの噂であった。彼は自宅には帰らず、柳田富士松宅で難を避けた。折から身重であった柳田夫人にはこの事件は過重で、出産の後、回復できなかった。それは暗い葬送であった。よねには、店方の災難よりもこの奥向きの不幸のほうがよほど辛かった。

あらゆる事業で飛躍を重ねているときに、なんで薄利の米の買い占めなど、と鈴木側の側は怒った。政府の意向を体して米価調節に協力しこそすれ、恨まれる筋はないと憤った。

しかしこれを、起こるべくして起きた事件と見る内部の目もあった。巨大資本がすでに組織を近代化し、財閥体制を整えつつあった時期である。鈴木商店は金子総帥にすべてを委ねた小商店のままであった。裾野ばかりが広がっていくことを危惧する声がこのころから生じていた。それは主に新しい学問をして入社して来たものの中から起こっていた。

金子体制の批判者の旗手は、ロンドンの高畑誠一であった。「本店が焼き打ちに遭ったのを苦い葉にして、災い転じて福にしなれば」と若い旗手は西川支配人に書き送って来た。

金子直吉が信頼してやまなかつた西川文蔵であったが、彼は高畑の最もよい理解者でもあった。西川は書いた。

井川は看板の事前債東相道の仕事を為し、慈善事業を天下に公表披露候。其鈴木は此手段を取らず、反て金子氏は如斯行為を目して天下に媚を売るものとして排斥しつゝあり、三井三菱が不浄の行為あるを知るは知識階級のみ、天下の衆愚は其徳を謳歌せり」

慈善事業というのは、米騒動の際、三井・三菱が多額の寄付を行ったことを指している。金子直吉は寄付の必要を認めなかった。事業を拡大し発展させることすなわち利益に直結している、われわれは多くの貢献を国家に対してしている、百万や二百万の寄付が惜しいのではない、とつっぱねていた。西川はようやく直吉を説得して寄付に応じたのであるが、出足は決定的に遅れていた。西川は「金子君一流の高潔なる遺り方は果して現代の思想に合致するや疑なき能はず」とぐちめいて書き添えずにはいらなかった。

西川文蔵は、鈴木商店においてなくてはならない人であった。新旧世代、子飼社員と学卒社員の間立って、いつも金子直吉を補佐してきた。そして本店の様子を細かくロンドンの高畑に書き送っていた。そこには苦衷を誰にももらすことのなかった西川の心情がひそかに流露して、格調の高い文章となっている。数多いそれらの手紙は製本されて、今も西川家に愛蔵されている。

西川文蔵は米騒動の二年後に病没した。長男に文蔵と命名していた直吉は、「未亡友人」と自称して慟哭した。西川が、その明敏さのゆえに、鈴木商店を徐々に覆い始めた暗雲を早くも感じとっていたこと、そのやさしさのゆえに、人より多く苦しまねばならなかったこと、それらが病弱であった西川

の死期をいつそう早めたことを、直吉は誰よりも知っていた。鈴木商店にはまた辛い葬送であった。資本家は素顔を持たないが、成金には固有名詞がつきまとう。鈴木商店は素顔をもっていた点でやはり成金なのであった。今も神戸の老人たちは米騒動を語るのに「鈴木倉庫には米と砂糖があふれていた」というのである。「金庫には金があふっていた」というのである。しつかり者のおよねさんがやり手の直吉の手綱をがっしり握っていたというのである。

飢えた民衆は顔を持った敵を求めていた。鈴木商店が米騒動において、贖罪の山羊となったのは偶然ではなかった。爆発的な民衆のエネルギーを自分のほうに呼び寄せる体質を、鈴木商店はもっていたというべきなのである。

倒壊

明治維新以来、相次ぐ内乱は農民から土地を奪い、インフレは貧民を巷にあふれさせた。土地は大地主に吸い上げられ、富は政商と呼ばれる資本家に雪崩れ込んだ。いつも政府は富める者たちを助け、肥え太らせた。相次ぐ大戦がこれらの構造をいっそう強化した。

成金という狂い咲きは、大戦後の恐慌にあっけなく潰え去ったが、権力に結びついた大資本は、組織の編成変えをしてこの危機を乗り切ろうとした。

三井系資本が流通・生産・金融の諸分野で独占的地位を確立し、三井同族会の改組を行って、三井

合名会社を設立したのは明治四十二年（一九〇九）である。それまで同族会の統制下にあった諸事業

を独立させ、それぞれが株式会社となった。ある部門が倒産しても、他の事業に波及しない体制を整えたのである。三井物産、三井銀行などの直系

会社は、三井合名の所有として三井家の支配下に置かれ、再投資を可能にした。巨額の資本の蓄積がこうして進められ、多角経営を基礎とする総合

コンツェルンの形態が整えられた。三菱合資が傘下の諸企業を独立採算制に転換させるのは明治四十一年である。他の財閥も似たような形態をとっ

て政治経済の複雑な変動に対処しようとし、独占的地位の確保をゆるぎないものにするための努力が払われていたのである。

鈴木商店が合名会社鈴木商店から株式会社を創設し、財閥体制の整備に入ったのは、遙かに遅れ



最盛期の鈴木本家(左から)二男若藏夫人慰子、(一人おいて)長男岩治郎夫人とみ、鈴木よね、岩治郎、(右端)長女千代子(大正八年)

て大正十二年（一九二二）三月のことである。社長・鈴木よね、副社長・岩治郎、監査・岩蔵、専務取締役・金子直吉、常務取締役・柳田富士松という陣である。

第一次大戦後のヨーロッパへの食糧輸出やジャワ糖買出動で大いにあって、「盲滅法の前進じゃ」と乗りに乗っていた金子直吉であった。彼はロンドンの高畑誠一へ書き送った。

「想ふに小生等は今日迄奉公人の資格にて此の経営を遣り来れるも、今後は主人の資格にて、鈴木商店に君臨するにあらざれば、大小の人材を縦横にし、事業界に優秀の地を維持する事態はざるべし」と。

岩治郎の長女千代子は、よねが溺愛してやまなかつた初孫でもある。彼女を急きよバりに送って高畑と結婚させた。高畑は主人にならねばならない人であったからである。千代子や高畑に有無をいわせないものがあつた。直吉の是とすることは鈴木商店にとつて是である。よねにとつても当然そうである。まして若い二人は今、鈴木商店の遠大な夢の大切な一部分であつた。

後継者を指名しながらも、金子直吉は引くときがなかつた。三井・三菱と年商を争うことはすでに無邪気な挑戦でしかなかつた。相手はその年の競争は捨てて、十年先、二十年先のための整備を行つていたのである。

大正十一年「飛びゆきて太平洋を春の風」と発句した金子直吉は、一年後には「背水の陣屋を囲む桜かな」と詠まねばならなかつた。財政の逼迫は急を告げていた。気付いてみると、背水の陣屋で敵に立ちむかっているのは彼ひとりであつた。一人であることを彼自身が選びとつていたのである。請め寄つていたのは債権者たちであつたが、鈴木商店の内部の批判も一人の独裁者に向けられていた。当時の資料の一つとして、和とじの冊子が残っている。大正十一年（一九二二）の重役室日記である。大正十一年一月一日の記録から始まっている。その日は晴天の日曜日であつたが、本店の食堂で盛大な新年の祝賀会が挙行されている。「お家様、御主人様、若御主人様、御来店八時五十分、九時五十分」店員はもとより外からの数名の年賀の客も記名されている。

この記録には休日がない。日曜日も二人の重役、柳田、金子は早朝出勤し、人に会い、外出し、接待している。接待の場所には長崎料理屋、宝屋の名が多い。直吉は常々「日曜日を休めというのなら、銀行も日曜日の利子はとるな」といつていた。

一方、よねは全く不規則に出勤していたようである。「お家様御来店ナラズ」とある日が多く、そんな日が数日続くと、十時か十一時ごろ「御来店」になって二時ごろ「御退遊アソバサル」の記述がある。彼女は小さい印鑑袋を女中に持たせて、黒い乗用車をゆっくり走り出動してくる。自宅の庭で丹精した花や野菜を運び込み、社員に配った。端午の節句には柏餅を持って来た。各部屋から人数分の柏餅を社長室に貰いに行く。社長室とはそのような部屋でもあつたのだ。

「御来店アソバサル」れた「お家様」は、社長室の大きな椅子にぼつねんと坐つて何をしていたか。たとえば雑巾を刺していたのであつた。よねの雑巾は、やがてできる神戸市立博物館にも陳列されるは

ずである。白い晒木綿に黒い木綿糸できっちり幾何学模様に刺してある。何百枚、何千枚という雑巾をよねはその生涯に作った。多くは「店」で用いられ、古くなって捨てられたが、知人への贈り物にもしたのである。祥童寺の今の住職は、先代から受け継いだよねの雑巾をつい近年まで硯の下に敷いていたという。

またよねは手習いで過ごすこともあった。どんな包み紙もしわをのばして保存されていた。その使い古しの包装紙の裏に「鈴木よね」の署名の練習をした。大会社の社長である。署名の機会はますます多くなっていた。どんなものもよねは粗末に扱わなかった。また他人にも無駄を決して許さなかった。そのようにしてよねは、金子直吉が文字通り東奔西走するのを見ていた。何回上京しても情況が好転するとは思えなかった。よねは直吉が敵陣を切り崩すのを幾度見て来たことだろう。直吉二十代のときから、彼が切腹する覚悟で窮地に挑み、みごとに脱出するのを見て来た。よねは一件落着の報告を受けるだけであった。

今度の苦況がかつてのそれと異質なものであることが、よねにはわかるのであった。手習いをする筆先に、雑巾を刺す指に、それは感じられた。しかし社長室でよねはいつも言葉少なであった。

冬の初め世は不景気にて

こはる日に市人多く賑はへとあたたけからぬ世のけしきかな

(波の音)

関東大震災は清氣に充ちた大正期に終焉を告げた。それは同時に暗い現代史の象徴的な幕開けでもあった。関東の地震に日本全体の経済は大きく揺さぶられた。鈴木商店は中でもっとも激しく揺さぶられたのである。

潰滅状態の経済界に、政府は何らかの保護と保障の手をのべねばならなかった。未決済手形は二億円を越えていた。それらは特殊銀行と普通銀行に半々に所有されていたが、特殊銀行の分の大部分は台湾銀行のものであった。そしてその大部分は鈴木商店への貸し出しであったのである。

鈴木商店は財閥としての体制は整えながらも、六十五銀行という小さな銀行を一つ持っているだけで、多くを台湾銀行に頼っていた。三井・三菱が機関銀行を持って不況時に備えていたのと対照的であった。金子直吉——後藤新平——台湾——台湾銀行というつながりひとつに、六十社を越える関連会社への融資を委せていた。

大正九年、台湾銀行の全貸し出し高に対する鈴木関係の比率は二割だった。それが昭和元年には七割にふくれ上がるという具合であった。そのうち一億円近くが無担保債権であったということは、両者の関係の放漫さを語ってあまりあるのであって、資本金四千万円の銀行から四億円以上の借金をしたという事実には、人々は「貸しも貸したり、借りも借りたり」とあきれたのであった。

昭和は二年になった。

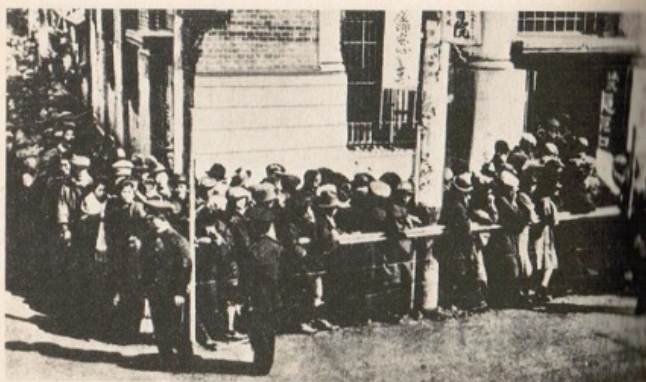
政府はまさか台湾銀行を見殺しにはすまい、台湾銀行はよもや鈴木を切るまい、と金子直吉は賭け

た。誰の助言も聞かなくなった直吉には、かつての躍動するような視野が欠けていた。金融恐慌の波は思いがけない荒々しきで襲いかかって来た。鈴木商店にとって絶望的な時間が、秒刻みで始まった。

三月末に台湾銀行が整理に踏み切った。その最初の仕事は、最大債務者である鈴木商店への新規貸し出しを一切中止するという通告であった。この事件は金融市場に新しい不安を巻き起こし、全国恐慌第二波の口火となった。

台湾銀行の首を決定的に締めたのは、市中銀行が台湾銀行への短期融資を一斉に引き上げたことである。これを最も強力で迫ったのは三井銀行であった。台湾銀行は日本銀行と政府に援助を求めたが前者はこれを拒否、後者は緊急勅令案でこれを補償しようとした。ところが枢密院がこれを否決してしまったのである。内閣は直ちに総辞職した。枢密院は政友会、政友会は三井系という系譜をたどってみると、ここにも鈴木商店の永年の競争相手が浮かび上がってくる。金子直吉の「天下三分」の競争を三井も確と受けて立ち、完膚なきまで鈴木を打ちのめしたのである。鈴木木の息の根を止めること、金子直吉を崩すには、全国の金融市場、いや世界恐慌の嵐を要したともいえるのである。

鈴木商店は倒産した。四月二日のことである。永年住みなれた東京の常宿、ステーションホテル二十号室を去る日に、金子直吉は「落人の身を窄め行時雨哉」と詠んだ。年の暮れに覚悟を決めて詠まれたのであろうが、その年の花の春にも、直吉に降る雨はまるで時雨のように冷たかったとも読めるのである。



金融恐慌で東京中野銀行につめかける預金者(昭和二年)

台湾銀行は鈴木商店を切るに先立って、実は鈴木商店再建の案を示して来ていた。高畑誠一や永井幸太郎等の新鋭を中心に新生を図り、株式会社鈴木商店を主体とする経営体制に入ること、金子直吉は鈴木合名の理事として関係会社の整理に当たることを要求したのである。これに対して「金子直吉は鈴木木の功労者である。これを辞めさせることはできぬ」というのが鈴木家の回答であった。

これで万事は休した。

よねはこの間「エレベーターのようで、降りてしまふまでは気持ちの悪いものやなあ」ともしたが、あたふたする様子はなかった。「直吉さえいてくれれば千人力じゃ」というのが口癖であったよねに、金子直吉のいない鈴木商店はありえなかった。

社長よねは、こうして退場した。

三十三年前によねは彼女自身の意志で、鈴木商店の主

の座についた。そして今、彼女自身の意志でその歴史に幕を降ろした。「よねは何もしませんでしたよ」と人々はいうかもしれない。しかし少なくとも二つのことはなしたのである。幕を上げることと降ろすことはよね自身の決定であった。

祥龍寺の境内でお薄茶碗むかむかを手にしたある人は、倒産のとき入社して一年目だったという。彼は上役と呼ばれ、会社の運命を知らされた。そして身の振り方を問われたという。関係会社に行くもの、他の企業に紹介されるもの、故郷へひとまず帰るもの、希望に応じて散ったという。

長い人生におけるたった一年の縁である。今なお彼と鈴木商店を結びつけているものは何なのであろうか。

道楽というものを知らなかった金子直吉の唯一の道楽は、学生を養育することであった。須磨一の谷の屋敷には常時数名の書生がおり、若い実業家たちが訪れ、梁山泊りやうざんぱくの観を呈していた。彼らに直吉はいったものだ。

「君たちは試験問題ひとつくらい間違っても九十点とか八十点で済むが、社会に出てする仕事は一つ間違ったら零点だ」。金子直吉の答案はいま零点和採点されて戻って来た。大正十一年正月に「命懸の喧嘩仕様ぞ戊の春」と詠んで自らを土佐犬に擬したのであったが、彼は今、惨敗の喧嘩犬であった。けれども倒産後、京都山科やまなかに蟄居ちやくこしていた直吉は、しおたれていたのではなかった。鈴木商店再建のために動き廻ることと、大家族を擁ようして窮乏きうぱんしている元社員の就職のために奔走すること、寧日ねいじつ



鈴木商店婦人会の集い (前列右から七人目)鈴木よね(明治四十三年)

い毎日だったのである。

直吉が青年たちを育てたように、よねは社員の妻たちを育てた。新妻たちは正装して「鈴木御本家」へ挨拶あいさつに伺う。案内を請うと執事が現れて奥座敷の大広間に通す。待つこと少々で「お家様」のご入来である。上座床柱じやうせどの前に紫縮緬むらさきぢりめんの厚い座布団を二枚重ねた高座が作られていて、よねはそこに座る。右側に脇息わきいせが置かれていて、「尼將軍」と呼ばれてもしかたのない演出なのであった。よねは柔らかない姫路訛ひめじまりで、固くなっている新妻に一言二言の質問をする。お目見えはそれで終わりであった。

正月や、よねの誕生日・八月十五日には賑やかな園遊会が催された。女主人の両脇りやうわきを岩治郎夫人、岩蔵夫人が固めた。二人は姉妹であった。県立第一女学校のハイカラな千代子ちよこは「孫姫様」と呼ばれた。

社員の妻たちには、結婚するとすぐ袖そでが一反贈られるのであった。よねの紋所桔梗ききやうが一つ入った鼠鉄色ねずくろの着物は、

鈴木商店婦人会の制服である。折々の園遊会、運動会などの催事のたびに、彼女たちはその着物で集まった。地位の上下を問わずその着物を着た。よねは女たちの無駄な華美贅沢の競争を固く禁じた。

鈴木商店という舟は難破した。社員は家族ともども水に落ちた。が溺れ死んだものは一人もいない。舟で学んだように、水に落ちて学んだ。鈴木は私の学校だという人も多い。そこで学んだことがその人の今につながっているのである。だから彼らは辰巳会に集う。悲壮な顔も感傷的な思いもそこにはないのである。

「帝人」や「豊年製油」「神戸製鋼」「播磨造船」を知らない人は少ないだろう。鈴木商店は滅んだ後にこれらの事業を遺したのである。債権者会議も開かれず、破産宣告も受けなかった。

整理会社・株式鈴木は「日商」となって再建され、めざましい発展を上げた。「日商」は昭和四十三年、岩井産業と合併して「日商岩井」と改称した。

金子直吉が鈴木家再興の最後の夢を賭けていた会社・太陽曹達は、その後、太陽鉱工株式会社に改組されたが、今もなお直吉の胸像と鈴木よねの写真を守り続けている。辰巳会の本部もここに置かれている。

晩年

その人を最もよく語るのは、舞台の上で主役を演じていたときよりも、そこを降りてからではないだろうか。

鈴木よねにとつて、鈴木商店社長の座というのは、やはり厚い化粧、舞台装束であったし、金子直吉にとつても、経済界の鬼才としての縦横無尽の働きは、舞台の上の立ち廻りのようなところがあつたのである。

よねは鼓、笛、謡、三味線などの芸事一般に長じていたが、晩年に最も熱中したのは和歌であった。毎週土曜日は黒い乗用車が彼女のために空けられた。西宮の師もとへこれで往復した。

西宮行きの日、よねはいつもより早く起きる。家の内外に祀つてある戎様、大黒様、荒神様とお参りする。これは毎朝のことだ、その途中、女中たちは働きぶりを点検される。箒の使い方、雑巾のかけ方、襖の開け立てはもとより、歩き方、返事の仕方にも、よねの鋭い目は光った。彼女が一番



鈴木商店は再建され「日商」(東京支社)となった(昭和四十三年)

嫌ったのは口応えであった。「はい」という答えだけが通った。「今からやります」も反抗であった。よねは絶対服従を要求した。

仏壇の礼拝が済むと食事である。食事は三度とも粥であった。「お粥たきの婆」がいた。雪平でごはんの少し柔らかめのものを炊かせた。気を配っていないと雪平の粥はこげるのだった。そんなときもあらかじめお詫びをすれば許されたが、黙っていると「こんな煙くさい粥は食べられん」といつて叱られた。

それから髪を結うのであった。初めは髪結いの老女が来ていたが、晩年はお傍女中のつやが丁寧に仕上げた。薄くなった結いにくい髪を一本ずつ並べるように梳いて結うのに、一時間はかかった。早く仕上げすぎてもならないし、遅くなってもいけないのだった。

それからお召し替えである。よねはちよつとの外出にも、それは夏も冬もなく、下着の全部をとり替えた。いっどこで不慮のことに出くわすかもしれないという自戒であった。

外出のときは必ず吸筒というものを携行した。金の水筒でおすすぎの湯がましを入れていた。訪問先に入る前に、よねは必ずそれで嗽をした。

よねの乗用車は阪神国道をゆくり走る。車の数は少なかった。若いつやにとつて、それは睡魔との闘いときであった。よねの一条乱れることのない日常に組み込まれている以上、つやにも乱れることは許されなかった。つやの厚い木綿の着物は一か月で膝が抜けるのであった。仕えるということ、文中通り膝をつくことであった。

その土曜日を控えたある日、「今日は少ししんどい」といつて早くに床をとらせたが、それが最期であった。来年は米寿だとよねも家族も健康を喜んでいた矢先の、あつけない死であった。昭和十三年（一九三〇）五月六日である。

金子直吉は、一夜にして長文の弔辞をしたためた。よね刀自の偉業を称え、婦徳を慕い、報恩の志を述べた。

「刀自ノ一生ヲ通観スレバ鬚髯男子ヲ矚若セシムルニ足ルノ概アリト雖モ刀自ハ居常甚ダ閑雅謹直ニシテ温容自任ジ喜ブコトアルモ怒ルコト無ク自誠スルコトアルモ人ヲ責メズ而シテ部下ノ愛育ニ努メタルモ何等教誡モ是ヲ加ヘズ（略）是レ鈴木商店員ガ刀自ヨリ受ケタル海嶽ノ御恩ト言ハズシテ何ゾヤ（略）唯惜シムラクハ吾等不敏ニシテ刀自ノ生前ニ於テ社礎ノ興新ト事業ノ回復ヲ為シ能ハザリシヲ無上ノ遺憾トス（略）」

一気呵成、号泣に似た文体である。

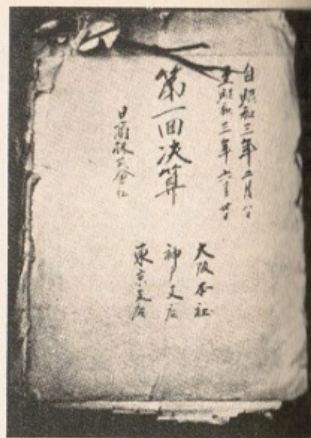
金子直吉は倒産後、一段と頑迷になり、誰の忠告にも耳をかさなかった。主家再興の情熱に憑かれて、多くの手紙を各方面に書き送っているのが、『金子直吉遺芳集』に収録されている。怒りに似た、ぐちに似た繰り返す言は、社会の歯車と噛みあわなくなつていよいよ純化していったかのようである。

直吉には、次男武蔵が東京大学で哲学を専攻することは不本意であった。大学院へ進むとき、もう一度翻意を促して「経済学部へ」と命じた。父の命令に、世間の父親が子に託す夢をはるかに越えた悲願を感じとりはしたものの、頑固さを何よりも強く父から受け継いでしまった武蔵は応じなかった。その父は子の労作、ヘーゲルの『精神現象学』の訳書を「岩波書店」から上梓したのを受けとったとき、「蟬なくや樹下の老翁はつんぼなり」とふざけた。この中に悲壮感など読む必要はないのであろう。有能な息子も蟬である、有為の高畑誠一も蟬である。おまえたちやかましく鳴くがよい、わたしには聞こえぬと老翁は開き直るのである。

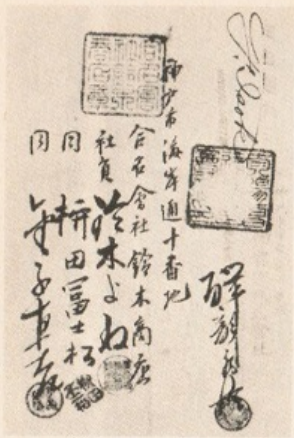
そして金子直吉には、あいもかわらぬ猪突猛進ばかりがあった。昭和五年、ボルネオのレジャン河流域に日本農民の移住と水田米作の問題を議し調査を行う(六十五歳)。マレーシアのポーキサイト調査(六十七歳)。西豪州鉄鉱の調査(七十一歳)。空冷式自動車装置・消音装置の特許を出願して許可(七十二歳)。ツンドラ事業を画策(七十四歳)。ジャワの砂鉄を調査(七十五歳)。大陸運河計画の調査(七十六歳)。漁業農業の件で舟山列島を調査しようとしてならず(七十七歳)。

現実を無視した夢は自己増殖を強め、狂的色彩を帯びてくる。直吉が少年のころにみた夢が、かつてに走り始めたような晩年であった。

昭和十八年(一九四三)末、東京で風邪に罹ったのをこじらせて御影の独居に戻ってから、直吉は再び起き上がることがなかった。事業のために私生活のすべてを犠牲にした彼に、看取る家族はな



鈴木商店の三代代表の自筆保証書(左)と現存する第一回決算帳簿(右)



った。この時期、直吉の最も近くにいた人は高畑誠一とその夫人千代子であった。その生涯の緊迫した局面で、好んで俳句に心境を叙して来た金子直吉に辞世の句がない。まるで彼の辞世の思いは芭蕉によってすでに詠まれてしまったかのようにであった。

旅に病んで夢は枯野を駆けめぐる

よねに遅れること六年、昭和十九年(一九四四)二月二十六日、享年七十九歳であった。

辰巳会の人々は、金子直吉がよねによって選ばれた、「お家はん」のメガネに叶ったといっている。しかし選ばれたのはむしろ、よねのほうであったかもしれない。

朝明けの明治時代には、多くの金子直吉が貧相な体軀に夢をきらつかせて存在したのではないか。けれども、ひとりのよねを選び、完成させたのは金子直吉だけであった。この二人の稀有の共演が鈴木商店の歴史であったといえよう。

形は株式会社であったが、鈴木商店はついに近代企業にはなりえなかった。同窓会を二十年間も続けている近代企業があるうか。

かといって、封建的な権威に裏つけられている鈴木家ではなかった。「白鼠」と自称して忠誠を尽くした番頭こそいたけれども、ただか大きな商家にすぎなかった。その女主人は田舎商人の娘であった。

たった三十年の歴史しか持たず崩れ去ったものに「鈴木王国」という呼称は大げさすぎるけれども、彼らは家に似た王国を築いたのである。その王国にふさわしい主を選んだのである。主は王者らしくふるまわねばならなかった。その生い立ちにおいて既成の如何なる権威とも無縁のひとりの女、鈴木よねは、八十七歳で死ぬ瞬間まで威厳に満ちたその役を演じ切った。

墓地の胸像が、その高い台座から降りることは決してないだろう。